

## 思考力，表現力を高める学習指導の在り方

佐賀市立北川副小学校 教諭 中山 孝 基山町立若基小学校 教諭 松尾 天  
白石町立有明南小学校 教諭 井上 昌子 大町町立大町中学校 教諭 石山 守

### 1 研究の趣旨

平成 15 年度に文部科学省が行った小中学校教育課程実施状況調査において，自分の考えを深め，その考えを表現するという力が十分でないという結果が公表された。本県では，平成 17 年度佐賀県小・中学校学習状況調査の結果から，児童生徒の学習定着状況は全国平均通過率と同程度，または，若干上回る教科が増加し，前年度より学力は改善傾向にあることが示された。しかし，資料を読み取ったり，自分の考えをまとめ記述したりする問題での通過率が各教科とも共通して低く，「思考力」「表現力」の定着が不十分であるという問題点が明らかになった。

そこで，本グループでは，問題点を解決し，基礎学力の向上を目指すには，これまで以上に思考力，表現力を身に付けさせる学習指導の工夫・改善が必要であると考え，研究を行なった。

### 2 研究教科・領域等

小学校社会科，小学校算数科，小学校理科，中学校理科において，課題の解決に向け研究を行った。

### 3 研究の成果

#### (1) 文献による理論研究等

##### ア 思考力について

認知心理学の見地から，太田信夫は「『思考』とは，何らかの問題に直面したときに，その解決のために行われる認知過程をいう。」<sup>(1)</sup>と述べている。また，辰野千壽は思考力について「『考える』という言葉は，いろいろに用いられているが，厳密に言えば，観察や記憶によって頭の中に蓄えられた内容をいろいろに関係づけ，新しい関係を作り出すことである。（中略）『考える力』といえば，『関係をつける力』ということになる。」<sup>(2)</sup>と述べている。

このことから，思考力とは問題解決を行う場面で，既有的知識や経験を基に，関係付けを行いながら知識の再構築を行ったり，新たな関係性を見い出したりする力と捉えた。

##### イ 思考力，表現力の向上

辰野千壽は，思考力について更に「問題を解決する際に，自分の考えを言葉に表すことは，自分の考えを順序立て，系統立てるのに役立つ，一般には問題解決を促進する。」<sup>(2)</sup>と述べている。このことから，表現することが思考を促進すると捉えた。

また，佐藤公治は，社会的構成主義の立場から「人は他者とはたらきかけ合うなかで自らの考え・知識を構成していくものである」<sup>(3)</sup>と述べている。この社会的構成主義の認識論は，現在，様々な教科に取り入れられており，協同学習は思考力を高める上で有効であると捉えた。

このことから，表現活動を伴った他者との相互交流が，思考力の向上に効果的であると考えた。

#### (2) 理論に基づく実践研究

本研究では，辰野千壽の定義に基づき，思考力を「関係を付ける力」とした。また，表現力は思考力に支えられて成り立つものと捉えた。

まず，既習事項と学習内容を結び付けたり，友達の考えと自分の考えを結び付けたりしながら自分の考えをもつ（思考）。次に，考えを整理・確認しながら，多様な形態の交流活動を通して，様々

な形で発信していく（表現）。これらの「思考と表現」の一連のサイクルを繰り返すことで、考えを深めたり、修正したりしながら、思考力や表現力を高めていくことができる考えた（図1参照）。

そこで、学習過程の中に他者との交流活動を行う場を設定し、交流活動において、思考と表現を1サイクルとした学習活動を繰り返させて、思考力、表現力を高める手立ての有効性を確かめた。

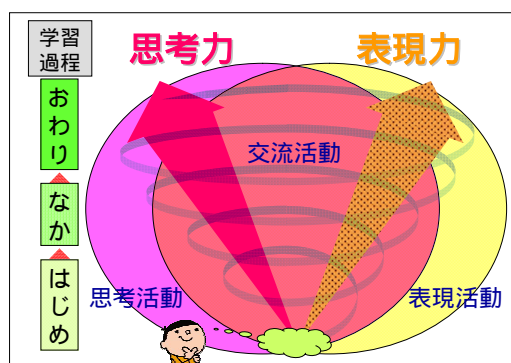


図1 思考と表現のサイクル

小学校社会科では、1つの単元の中に複数回の討論の場を設けた。そこは、社会的事象に対する思考内容を吟味・検討、修正する場となり、児童に考える視点をもたせ、考えを深めさせることができた。また、討論において、根拠を明確にした表現ができるようになり、表現力の向上も図ることができた。

小学校理科では、仮説を立てる過程で、事象に対する考えとその根拠についての同一点・差異点を意識させた話し合い活動を設定することで、より根拠に基づいた仮説をもたせることができ、その後の学習活動に対しても目的意識をもって取り組ませることができた。

小学校算数科では、「見通す」場面や「練り合う」場面に小集団交流を取り入れた学び合い活動を行った。交流の内容や集団編成を工夫することで、児童は自分の考えを確認したり、友達と自分の考えを関係付けたりしながら考えを深め、筋道を立てて自分の考えを説明できるようになった。

中学校理科では、仮説を立てさせる場面で、自分の考えを明確にさせ、多面的に問い直させるために、2回の小集団交流活動を取り入れた。生徒は、仮説を基に実験結果を予想できるようになった。さらに、仮説と実験結果を比較し、仮説と関係付けた考察を行えるようになった。

このように、思考については、他者との交流活動の場を設定し、自分の考えを他者の考えと比較、吟味・検討させ、また、自分の考えにない考えを取り入れさせることで、考えを広げさせたり深めさせたりできることが確認できた。また、交流活動においては、話し合いの視点を意識させることで、思考力を高めることも分かった。

表現については、他者との交流活動において、考えを分かりやすく伝え、相手の理解を求めようと取り組ませることで、表現力が高まることが確認できた。また、児童生徒は考えを表現する際、もちえた情報を整理しながら自分の考えをまとめるため、連動して思考力も高まっていくことも分かった。

さらに、この思考活動と表現活動を繰り返し行うことで、考えの多様性や妥当性に気付き、より質の高い思考や表現ができるようになった。

#### 4 今後の課題

- (1) 交流活動において高められた思考内容を、効果的に表現へつなぐための工夫
- (2) 思考力の高まりを、客観的に見取るための評価方法の工夫

#### 《引用文献》

- (1) 太田 信夫 「認知過程における思考力・判断力」『小学校 思考力・判断力』1995年 図書文化社 pp.35-36
- (2) 辰野 千壽 『考える力の伸ばし方・改訂版』1995年 図書文化社 p.14, p.140
- (3) 佐藤 公治 『認知心理学からみた読みの世界』1996年 北大路書房 p.30